



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	調査ノート：高齢者一人暮らし世帯の貧困：貧困の世代的再生産の視点から
Author(s)	青木, 紀; 石山, 神二; 八子, 竜太; 梅原, 加奈子; 菅原, 真理子; 落合, 宏則; 埴, 朋子
Citation	教育福祉研究 = Journal of Education and Social Work, 10(2): 1-15
Issue Date	2004-02
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/28376
Right	
Type	bulletin
Additional Information	



Instructions for use

調査ノート：高齢者一人暮らし世帯の貧困

—貧困の世代的再生産の視点から—

青木 紀・石山 神二・八子 竜太・梅原加奈子
菅原真理子・落合 宏則・埴 朋子

はじめに

これまで主として貧困な生活を余儀なくされ、場合によっては生活保護を受給せざるを得ない母子世帯の分析を「貧困の世代的再生産」という視点を据えて分析してきた。その中で注目された事実は、聞き取り対象者から「親」のようすを聞き取るという間接的なものであったが、とくに生活保護世帯のような場合、親もまた、生活保護受給という事例も含め、多くが余裕のない困窮した生活を送っているという現実（推測）であった⁽¹⁾。

そこで今回は、視点を母子世帯の「親」に当たるかもしれない、地方に暮らす一人暮らし高齢者世帯に焦点を当ててみた。もちろん、「かもしれない」という断りは、すでに行った母子世帯調査の親に対するインタビュー調査ということではないという意味であり、ある地域の、生活保護受給世帯を含む一人暮らし高齢者を対象にした、ある意味で「ランダム」に近い調査であるということである。すなわち、この場合も、母子世帯調査と同様に、ある地域の民生委員さんの紹介によってインタビューを引き受けてくださった方々を対象にしたものであるが、その中に確実に「子ども」が母子世帯になっている一人暮らし高齢者世帯が含まれているかどうかは、まったく予測できないことを前提に進めた調査である。

とはいえ、現在のわが国の生活保護制度適用上から判断して、生活保護受給高齢者世帯を多く含んだ調査という性格からは、その子どもたちの（といってもすでに大人であるが）生活もそれほど余裕のある生活を営んでいることは推測しにくい。その点で、ある種の「貧困の連鎖」が推測される可能性が高いであろうし、また一人暮らしで

もやはり、それなりの生活水準格差という「階層性」を含んでいる可能性も当然予測される。さらに高齢者世帯一般という階層差を帯びた中での一人暮らし世帯という視点をいれば、高齢者世帯の生活をめぐる貧困・不平等に関する問題はもっとクリアに見えてくるかもしれない。しかし、ここでは「一人暮らし」ということを前提にしたことから、残念だが、高齢者世帯全体あるいは高齢者を含む一般世帯という枠組みの中で調査をすることはできなかった。また、まったくこれはわれわれの事情からだが、これまでの関連する研究と既存の収集された資料をもとに十分検討しておくこともできなかった。そのことを前提に、ともかくインタビュー調査の11例から、「貧困の世代的再生産」の構造に言及してみようというのが、この調査ノートである。なおこの調査は、平成15年度の学部授業である「社会福祉調査実習」として、「高齢者一人暮らし世帯調査—その生活課題を明らかにする—」として、北海道K町で実施したものである。参加者は教員と3年次学生及びTAとしての大学院生であった。

1 既存の統計等から見た一人暮らし高齢者世帯の現状と調査事例世帯

(1) 一人暮らし高齢者世帯の動向とその特徴

一人暮らし高齢者に関する調査研究資料は、おそらく収集するとすれば、相当な量に昇るのではないかと推測される。しかし、上述したように、それらの調査研究の成果をふまえて、今回の調査結果を位置づけ、考察するだけの余裕がなかった。そこで、さしあたって内閣府が公表している既存のデータ・成果を借りて、最近のわが国の一人暮

らし高齢者世帯の生活の現状をまず特徴づけておきたい。

さて、内閣府政策統括官（総合企画調整担当）高齢社会対策担当『多様なライフスタイルを可能にする高齢期の自立支援政策研究報告書について―「活動的な高齢者」、「一人暮らし高齢者」、「要介護等の高齢者」―』（平成15年5月）における「一人暮らし高齢者」に関するデータは、要領よく、コンパクトな形でまとめられている。そこまですで、簡単に本稿に必要な限りで簡条書的に引用しておきたい。

- ・「これまで『一人暮らし高齢者数』は男性、女性ともに一貫して増加を続け、平成12（2000）年時点には男性74.2万人、女性229万人に達しており、女性が約75%を占める」
- ・「単身高齢者になる要因としては、男女とも“死別”が最も多い（男性49.9%、女性76.0%）が、その割合は女性の方が高くなっている。また、男性では“離別”が16.5%と女性（8.8%）の2倍近い割合を占めている。“未婚”も男女とも1割程度（男性10.3%、女性9.5%）存在する」
- ・「単身世帯にも『有配偶』の者が8.2%、女性2.2%と見られているが、これは、国勢調査上では、入院・入所等の場合は別世帯として捉えられる（国勢調査の定義から）ことから、多くは入院・入所等であると考えられる」
- ・「一人暮らしであっても、子どもの居場所から比較的近い場所に居住している高齢者も多く、子どもが近くに居住していない場合と比較するとその生活環境やライフスタイルは大きく異なると考えられる」
- ・「一人暮らし高齢者（特に女性）は、夫婦世帯等に比べて経済生活条件が低い者の割合が高い。このため……その状況を把握する指標として『一人暮らし高齢者の年間所得（120万円未満）』を設定した。ここでは、国民年金の満額給付額（年約80万円）や生活保護における最低生活保障水準（高齢者単身世帯で年約100～130万円）

を考慮し、年間所得120万円未満の者の割合を指標とした」

- ・「『一人暮らし高齢者の年間所得（120万円未満の者の割合）』は、平成13年時点で男性21.5%、女性37.6%と女性の方が高い。120万円未満の割合を二人以上の世帯の一人あたり所得と……等価所得（世帯における規模の経済を考慮して、世帯人員当りではなく世帯人員の平方根当りで算出した所得）と比較すると、単身世帯の方が男性の場合で10.5ポイント、女性の場合で26.6ポイント高く、二人以上世帯と比べて単身世帯には経済生活水準が低い層が多いことが示されている」
- ・「生活保護受給者の多くは、高齢単身世帯である。生活保護を受給している高齢者世帯のうち、単身世帯の割合は87.9%を占めている」
- ・「なお、一人暮らし高齢者全体に占める生活保護受給者（被保護者）の割合は、平成13年時点で10.3%である」
- ・「一人暮らし高齢者の『貧困率』及び『貧困度』に関しては、「貧困線を、65歳以上人口を対象とした調整1人当たり世帯当たり年間可処分所得の中央値の30、40、50、60%と定義した場合の『貧困率』及び同中央値の50%と定義した場合の『貧困度』が算出されている」
- ・「貧困線を50%とした場合では、貧困線の金額は1,191千円となり、これを下回る世帯の割合（貧困率）は、男性単独世帯24.9%、女性単独世帯42.0%となる。また、貧困線を50%とした場合の『貧困度』は、男性単独世帯で39.1%、女性単独世帯で38.2%となっており、いずれも夫婦のみの世帯（35.5%）を上回っているが、男女間の差については統計的に優位な差はない」
- ・「一人暮らし高齢者では、……借家にいる比率が高く34.6%を占めていること、特に賃貸住宅に住む場合に経済的理由や保証人がいない等の理由により居住水準が低くなる場合が多いことと考えられる」「さらに『最低居住水準以上で設備等の条件を満たす賃貸住宅に住む割合』

は、単身者で47.6%と過半数に満たない」⁽²⁾

(2) 調査世帯の位置づけと居住条件

以上の一人暮らし高齢者世帯の「一般的現状」をふまえて、次にインタビュー調査を引き受けていただいた一人暮らし高齢者世帯の生活概況を整理した表1、表2から、その特徴を確認しておこう。

まず表1から見ておくと、インタビュー対象者の性別では、女性が8、男性が3であった。一人暮らしになった契機は、配偶者の死亡が大半を占めるが、事例1のように、未婚の三男と長く暮らした後、三男の結婚によって「嫁から拒否され」一人になった者、事例4のように、未婚のまま、

途中から義兄と同居していたものの、義兄の死亡によって一人暮らしになった場合、そして事例9のように50代になって離婚を余儀なくされた場合なども含んでいる。このような一人暮らしの要因の分類からは、先の全国的動向で見た特徴を、それぞれ代表するような事例がここには含まれていることがわかる。

また経済的な面で見ると、大半は国民年金あるいは厚生年金を生活基盤としているものの、無年金世帯が1（事例9）、国民年金といっても「満額」を受給していない者が多く、生活保護を受給している世帯が女性で3、男性で2、かつて受けたことがある世帯が1というように、半分以上が生活保護受給している。「聞き取り」による年間

表1 調査世帯の概況(1)

事例番号	現在の年齢	性別	一人暮らしになった要因	現在のおよその年収	生活保護受給の有無	年金の種類と有無	仕事の有無
1	86	女性	息子の妻の同居拒否	100-150万円	受給している	国民年金	していない
2	79	女性	夫の死亡	50-100万円	受給している	国民年金	していない
3	73	女性	夫の死亡	50-100万円	受給している	国民年金	していない
4	71	女性	同居していた義兄死亡	50-100万円	(受給していた)	国民年金	していない
5	82	女性	夫の死亡	50-100万円	していない	厚生年金	していない
6	79	女性	夫の死亡	50-100万円	していない	厚生年金	していない
7	76	女性	夫の死亡	わからない	していない	厚生年金	していない
8	71	女性	夫の死亡	50-100万円	していない	国民年金	していない
9	71	男性	離婚	100-150万円	受給している	なし	していない
10	84	男性	妻の死亡	わからない	受給している	国民年金	していない
11	80	男性	妻の死亡	100-150万円	していない	国民年金	していない

注) 調査結果より石山神二、八子竜太及び筆者作成。

表2 調査世帯の概況(2)

事例番号	健康状況	定期通院	生命保険の有無	住居の現状	近所つきあい	ちょっとしたこと頼むことができる人	除雪の状況
1	健康	している	かけていない	公営住宅	よくある		時々三男
2	多少問題	している	かけていない	町営住宅	よくある	いる	なし
3	健康	している	かけていない	持ち家(土地借)	よくある	友人	自分で
4	多少問題	している	かけていない	公営住宅		昔の店の客	他に頼む
5	健康	している	かけていない	町営住宅	よくある	近所の人	大抵自分で
6	多少問題	していない	かけていない	弟から借家	よくある	近所の友人	ヘルパー
7	問題多い	している	かけていない	持ち家(土地借)	ほとんどなし		ヘルパー
8	健康	していない	かけていない	持ち家	ほとんどなし	弟	大抵自分で
9	多少問題	入院中	かけていない	民間借家	よくある	近所の友人	自分で
10	健康	している		公営住宅	あまりない	親戚関係	ヘルパー
11	多少問題	している	かけていない	持ち家	よくある		自分で

注) 表1と同じ。

の収入グループでは、50～100万、100～150万円の二つになっている。しかし、生活保護を受給していないからといって、受給世帯より年間収入が多い、あるいは「楽な生活」とは必ずしも言えない現状は、この表からも伺える。

次いで表2を見ると、一人暮らしの成立自体が一般には「健康」を条件とすることから、半分くらいが「健康」と回答し、半分くらいが「多少問題がある」としている。だが、定期的な通院は、やはり高齢者という性格を反映して、ほとんどがしている。なお「生命保険をかけているか」では、ほとんどがかけていない。住宅状況については、持ち家で土地付きは2例のみであり、あとは公営住宅か、民間アパートか、土地なし持ち家となっている。やはりK町自体に「支庁」がおかれているとはいえ、地方であることを考えた場合、相当規模の農家あるいは公務員など「安定」した職業に就いていた人々の持ち家以外、その資産は貧弱であり、生命保険の状況をも考慮して考えると、資産は「何ものなし」に等しい状態とも言える。ここで、いわゆる「衣食住」の「住」に関する状況を見ておくと、「住宅に何か問題はありますか」に対して、以下のような声が聞かれた。

- 「隣のしきりはベニヤ板で、その上に白い紙を貼って壁のようにしているだけ。洗濯機は人によっては『うるさい』と言ってくる人がいるから、隣で使っているときには使わない。テレビの音も黙って何も言わない人もいるけれども文句を言う人がいる」「(聞き取りを家でしたい旨を民生委員さんに話すと『汚すぎて入れないよ』と言われた)」(事例1)
- 「6月にずっとチャイムが鳴り続けたことがあった。夜中の1時頃。向かいに少し頭のおかしな男の人が住んでいる。医者呼べとか、警察呼べとか騒いだ。今は落ち着いているようだが不安だ」(事例2)
- 「自分の持ち家だが土地は借りている。もう30年くらい入っています。もう1、2年いると周りに迷惑をかけてしまうけど、居たいと思います。(民生委員さんによれば、被調査者の家がゴミ屋敷のようで、玄関に上がるのさえ困難であるとのことから、また本人としても、自分の家以外なら調査に協力するということだったので、ホテルで聞き取りを行った)」(事例3)
- 「以前は店をやっていたので住居が二階で手洗いに行くのが大変だった。引っ越しを決意したが公営住宅に入れず、一度は民間アパートに。なかなか貸してもらえなかった。独り身だったので。やっと見つかったアパートは、風呂付き手洗い共同で、水道電気代込みで3万5千円。保証人や敷金礼金がいらぬということで、古くて汚かったが入った。その後、入居一ヶ月で今の公営住宅へ。家賃が高い(1万5千円くらい)、街から遠く、病院へ行くのに不便だ」(事例4)
- 「3千なんぼくらい。お風呂がないからデイサービスのお風呂に1週に1回だけ。最近はなれた。この家でお風呂を付けてもいいけど、出るとき直して出ないといけぬから付けていない」(事例5)
- 「弟に家は借りているからね。家賃はゼロ。でも直して使っているから毎年何万ってかかる。じっと我慢して、寒くてもね。ぼろの家だから。新しい家に入りたいわ。でもここ守らないとね。断熱材が入っていないから、冬は寒くて、夏は夏で暑くてかなわない」(事例6)
- 「元々は社宅だったのを安く買った。土地は借りている。年間5万くらい。柱が1本おれている。立て直して、もう少し小さくても頑丈な家にしたいが、お金がない。ともかく傾いているんです。この家」「(一階は居間、台所、寝室。しかし、居間に布団が敷いてあって、そこで寝ている。室内は整理されている)」(事例7)

- ・「屋根だけ直してもらった。築40年で湿気がひどい」(事例8)
- ・「現在月3万のアパート。町営住宅に応募し結果待ち。家の風呂が壊れたままになっている。そのため銭湯に山の上からバスで行かねばならない。午後3時からだがバスの最終が5時20分なのであわてて入らなくてはならない」(事例9)
- ・「月、3千2百円。風呂がないので自分で外に作った」(事例10)

以上のように、高齢者が毎日の生活の大半の時間を過ごすであろう、文字通りの生活の拠点たる住宅環境の現状には相当厳しいものがある。特に冬場の季節を考えたとき、風呂が設置されていないといったことは、旧炭坑地の公営住宅などや札幌の民間アパートなどにもあるが、高齢者の生活にとってはつらいのではと想像される⁽³⁾。個々の事例に見る「室内の汚さ」といった問題も含めて、かなりの部分が、最低限の文化的かつ健康な条件が確保されているとは言い難い状況にある。

なお「近所つきあい」などの視点で見ると、「ほとんどない」「めったにない」が3例あるが、いずれも「ない」としている場合は、親族に「ちょっとしたことを頼む」としており、近所の友人ではないことがわかる。それは、この場合、近くに娘やあるいは兄弟・姉妹などの親族が居住していることの反映でもある。逆に、子どもや親族がいない場合、「近所の友人」などがその役割を果たしている、といった特徴が見られる。

2 貧困・低所得一人暮らし高齢者世帯の生活と年金・生活保護

さて、インタビューに応じていただいた人々は、どのような生活史を辿って現在に至っているのだろうか。わずかな時間の聞き取りで一体どれくらい的人生がわかるのかという疑問も当然あるが、いわゆる「社会経済的地位の軌跡における『累積

的有利』『累積的不利』(cumulative advantage)(cumulative disadvantage)」という視点を念頭に置きながら⁽⁴⁾、聞き取り内容を紹介していこう。なお、以下では、さしあたって生活保護受給を指標にして、二つのグループに分けて掲載しておこう。

(1) 生活保護受給世帯

・「父は発電所勤務、母は呉服屋の針仕事の内職をしていた。7人きょうだいの長女で、実科女学校を出た」「旦那は近所に住んでいた人で10歳年上だった。給料制の豊職人で、東京、釜石、K町とずっと社宅で暮らしていた。どうにか食べていた。借金もなかった。59歳の時夫が胃ガンで亡くなり、それから私は病棟婦(結婚前見習い看護婦として働いたことがあった)として働いた。旦那がいたときは生活保護なんて考えたことはなかった」「三男の息子とずっと一緒に暮らしていたんだけど、彼女ができて、その彼女が『兄嫁も姉もいるのにどうして私が面倒を見なければいけないの、いやだ』と言われたのね。だから私4年前にある老人ホームに入ったの」「老人ホームは雰囲気暗かった。寝て半畳、座って1畳、3人で3畳……ひどいところだ。朝ご飯も梅干し1個にサンマの缶詰の小さいの一切れを半分にしたやつ……」「しかし、三男があるとき上司に『母親を老人ホームにぶち込んだらどう』と言われたらしく、突然トラックで迎えに来て、それから昔の母子住宅だったところに一人で住んでいるの」「年金は私60歳の時からもらっているからその分少ない。去年の7月の役場の人がやってきて、生活保護を勧められた。『Aさん、今のままじゃとてもじゃないけど生活大変なんだし、食べ物もしっかり食べなきゃ。何にも恥ずかしいことじゃないんだから保護を受けた方がいいよ』と言われてね。それから申し込んでくれて、調査の後許可になった」「年金はなるべく使わないようにしている。次男が病気だし(精神障害で施設にて生活保護受給)、病院行くとときにハイ

「電氣使わなきゃならないし」「ここに来て生活保護を受ける前の2年間、お金を切りしっちゃいけないと思って、空き缶のふた切って、中に石を積めてろうそくを立てて、ろうそくが倒れないようにし、電氣使わないで過ごした。うまくやったんだよ。テレビもつけないもの。ラジオのちっちゃいのね。孫からもらったやつ。あれ一つあればけっこうなもの」「仕送らないよ。子どもたちも仕送りできるような余裕なんかないもの」(事例1)

- ・「父母は道内で漁師をやっていました。7人きょうだいの末っ子で小学校6年で卒業しました。母が亡くなっていたので、大阪の姉の家に引き取られ、判事さんの家に奉公し、終戦後K町の農家に嫁ぎました。兄の勧めで食糧難の経験から」「両隣がいなく、ぼつんと建っている一軒家で、ランプで生活していました。畑が小さかったので、子どもが小さいときは年金も十分に払えませんでした」「年金は60歳から受け取っているんで安い。農家は秋の1回しか収穫がないので、国民年金を昔3～4年滞納したことがあった。後から、さかのぼって払おうとしたが期限切れでダメでした。土建で日払いの収入が入るようになって支払いできた」「夫は自分の金銭は自分で管理していて、給与明細のようなものは一度も見なかった」「現在保護は受けています。4万なんぼ。うち2万は電氣代等の引き落としのために口座に残しておく」「子どもからは定期的には何も無い。たまにお盆とお正月、敬老の日の時にくれることもある」「このほか畑を貸してるけど1年で3万」「(将来の同居に関わっては)できれば同居した方がいいと思うけど片方は家族でも片方は他人だから……自分が頑張れるうちは頑張る」「生活保護を受けている立場では気が引ける」「(生命保険について)以前はかけていたけど、生活保護ではかけられない」(事例2)
- ・「岩手県釜石市で生まれ。4人きょうだいの2

番目(本当な7人で3人は死亡)。両親は炭焼きと畑仕事やっていた」「夫はお酒飲み過ぎで肝臓と腎臓をやられていて62歳で亡くなった。それまでは大工でした。私は60歳ころまでアスパラの工場でパートとして働いていました」「国民年金4万2千5百円と約3万円の保護費。(息子からの仕送りについて)私は何もいただいたことはありません。めったにないです。」「お正月の時だけ5千円もらいます」「(日常的な買い物や大きな買い物について)娘が買ってきてくれる。でも生活保護を受けていたら、大きな買い物はできないんだって娘に言われる」「今は楽だとも言えないし、困っているとも言えない。もらったお金で生活できればそれでいいと思います」(事例3)

- ・「道内で生まれた。7人きょうだいの4番目。父は畳職人から炭坑、化学工場などで働き、実母は早く死んだので、2人目の母親の連れ子としばらくいっしょだった。私は尋常高等2年で卒業し、農家の手伝い、工場のお茶汲み、義兄の旅館手伝い、東京の料亭、そして再び道内の温泉で働いて、その後ラーメン屋を開業した。結婚は若いときに結核を患ったり病気もしたことがあってずっと一人だった。東京にいたとき『調理師の免許を取れ』と言われ取った。それでG温泉で義兄が食堂を任されていた時、義兄の勧めもあって隣にラーメン屋を始めた」「平成2年にその兄が脳溢血で倒れ、途中から看病のこともあって同居したのだが、平成7年に死亡。その後、一人になった。そのとき義兄の借金もあったのだが、それを保証人として返すのとラーメン屋を止めるのが同時だった。体が動かなくなってきてね。だから結局お金も貯められなかった」「生活保護1年3ヶ月ちょっと受けたんですよ。いいのかな、いいのかな、若い人が納めているの使っちゃって、と思いつつながら。病院で会う人に『病院代かからないだろう、いいなー』って会う度に何回も言われて、そういうことがあって気が重くなる面があった

のね。しばらく自分のあれだけでやってみよう
と思って福祉の人に言って。福祉の人は『あまり無理しないでくださいよ。相談は民生委員の人でもいいから、一度止めたからといってだめということはないんだから』って言うてくれたけど、辞退させてもらって。この冬灯油代払ってどうなるのと思っているけど、特別大きな病気でもないからね。生保お断りした状態を保っているからね」「(収入は現在国民年金のみで、1年で78万2千2百円。夏の間は灯油代は袋に入れて別に貯めている。年間4万5千円ほどかかるそうである) この冬が勝負ね」「(さらに生保を断りたいきさつについて) 30何年と仕事をしていると想像以上に顔を覚えられるから……ぶっちゃけて言えば、ここで30何年も働いてきたのに、生保もらって生活することが凶々しいことだと思っちゃったわけ。他の知らない土地ならいいけど、働いてきた土地でもらって生活するのは。私ずるい性格なのかな。そう思ったら(胸を押さえて) ここがきゅっとなつてね。鬱まではいかないけど、青い空の下でもっと……精神的な病気になっちゃったらいやだな。この気持ちをコントロールできればいいんだけどね。部屋に帰ってきて一人だし、知らない人にしゃべる訳にはいかないから、こういう気持ちがひどくなってきたんです。食欲もなくなってお通じのバランスがとれなくなって、自分の気持ちの赴くままに生活してみたいなと思って。今は経済的には厳しいけど気持ちとしては楽」「生保の方が生活レベルが高い。10万以下の人は生保よりも低い。生保受けているとゴミ袋が何度か支給され、大型ゴミの申請もただになるのに、どうしてそうでない人にゴミ袋くれないのかなあ。日本の福祉行政って矛盾しているなあ。月2万くらいの収入をもらえるような仕事もできなかった。行政って片手落ちだよ。国民健康保険から4,650円戻ってきたときも収入と見なされ生保から引かれた。介護保険だから50円でも引かれるよ。50円あれするのに、それだけ手間かけてね」(事例4)

- 「東京生まれの東京育ち。4人兄弟で4人とも大学は卒業している。父はいわゆる『山師』のような仕事をしていた。自分は、卒業後通信社を2年半勤め、航空自衛隊、養護施設、山の管理人などとして働いていたところ、実家から『帰ってこい』と言われ、そこで友人の妹と成り行きで結婚した。彼女は道内W市の旅館の娘だった」「旅館の仕事は楽ではなかったが何とか……夫婦仲も悪くはなかったが、どうしても内地(東京)に帰るのをいやがっていた。親も『帰ってこい』『帰ってこい』というし、自分も帰りたいかった。それだけで……全部奥さんに渡し、少しのお金と着の身着のままでK町に来た。たまたまそこで新聞配達の仕事を見つけて」「その後アルコール依存症になった。現在それで入院中。生活保護は病院に来るようになってヘルパーさんに勧められて」「離婚したときすべてを女房のところにおいてきたので、(年金に関して)今どうなっているか何もわからない」「生活保護で車を失った」(事例9)
- 「札幌で生まれた。父は漁師でR島で仕事をしていた。尋常小学校卒業後、昆布取り、ニシン漁をやり、兵隊に行き、除隊後結婚した。その後、土建業、K電工、大工などとして働き、6人の子どもをもうけたが、生活は大変だった。家内も苦労したので楽をさせたいと頑張ったが、入退院を繰り返した後亡くなった」「(国民年金に関して)満期になっていない。若気の至りで、さかのぼってかければよかったが、子どもが生まれる前ならそれもできたが、すぐに子どもが多くなり不可能になった。(収入や支出についても、すべて亡くなった奥さんに任せていたようで、保護の給付額もよくわからないということだった)」「春から秋にかけてK町で働き、冬に内地に出稼ぎに行き、4月に帰ってきて失業保険をもらっていた」「いやというほど苦労した。いくら稼いでも追いつかない。生活が楽になったのは最近15年くらいだ」「子どもたちの家庭もけっこうギリギリ、自分のカマドが

安定して始めて親兄弟のカマドもみれる。親として子どもに何もできなかった代わりに、子どもにも世話になりたいという気持ちがある」(事例10)

(2) 年金世帯 (非生活保護受給世帯)

- 「K町の近くで生まれた。4人きょうだいの3番目。両親共にニシンの加工場で働いていた。私は高等小学校卒業し、札幌のいとこの家(校長先生)で女中をやって、帰ってきて嫁に行った」「夫はそこで漁師していた。後に魚が捕れなくなってから、夫の父の口利きでK町の農協で働くこととなった。お金は良くないが仕事は一応安定していた。経済的には『普通』で、主人も一人暮らしのお母さんに仕送りしていた。私は『出面』に歩き、夫の死亡後も農協の倉庫で選別の仕事をしていた。今は国民年金と厚生年金(これは自分が働いていたときのもの)、少ないが一人暮らしだから大丈夫」「(生活保護について)受けていない。よそには受けている人が多いと思う。なんとなくわかる。でもよそのことは他人のことだからね。(息子からの仕送り)はない。息子は2人の子どもを抱えて学校に行かせているからね」(事例5)
- 「生まれはこの近くの町。5人きょうだいの一番上。父は畑仕事と測候所にも雇われて仕事をしていた。私は小学校卒業後家事と畑仕事をやっていたが、親戚の紹介で結婚した」「夫は養豚や皮革の仕事をしていた。どうしても苦しいため、日雇いでも働いた。そうすると冬には失業保険がもらえた。それが魅力だった。しかし、結婚後の生活は経済的に困ったことがよくあった。仕事も不安定であった」「現在月6万円の年金で暮らしています。(健康保険に関して)遠隔地保険というやつね。『一緒に住んでないけど家族だよって』(長男)うれしかった」「(仕送りは)ないよ。できない。やっぱりそれぞれ生活しているから、何もくれないよ。私がやるくらい」「次女の旦那さんがボーナスの度に送れって言って送ってくれる」(事例6)
- 「親は道内のA市で農業をやっていた。2人きょうだいで兄は消防士、私は小学校6年頃からほとんど学校に行かないで畑仕事をしていた。というのは、父は早くに亡くなり、農家を小さくし、母が農業していたから。21歳で結婚した」「夫は最初はS市で国鉄に勤めていたが、給与がいいということでA市のM鉾山で事務として働き、その後M物産の山がこちらにあって、坑木ね、それでK町にきたの。今は年金だけだね。父さんのいくらかと私の国民年金。(いくらくらいですか)それは言えないわ。わからない。だんだん下がってきている。まだ子どもに病院代ちょうだいって言わないだけはある。(生活保護に関して)年金だけでいい。生活保護は恥ずかしいから、考えたことはない。おばあちゃんが生活保護を受けてたら、孫たちがかわいそうでしょ」「子どもたちはみんな精一杯だから、私なんかみそなめてでも……隣近所みないいいから野菜など持ってきてくれる」(事例7)
- 「隣町で生まれた。両親は農業をやっていた。父は冬には鉾山でも働いていた。私は尋常小学校卒業後5年間奉公し、お見合いで結婚した」「結婚後はK町でずっと農業。はじめは山を開墾していた。その時なら本当に大変だった。もっと山奥の開拓だった。水温が低いためうまくいかなかった。経済的に大変だった。モノはとれないし、収入はないしね。その後、夫の妹の旦那さんが亡くなって土地を買い取ったの。夫は交通事故でなくなり、その時私は65歳だった。それでも、とにかく家、土地、山を残してくれた(ので今がある)。今は国民年金、2ヶ月で約10万円。そのほかは休耕奨励金年間14、5万かな。(仕送りは)いっさいなしです」(事例8)
- 「青森で生まれた。父は長男でなかったの北

海道に土地を求めてきた。開拓地主の小作になり、農地解放で自作になった。自分は昭和19年に徴兵になり、20年に終戦で帰り、隣の部落の娘と結婚した。「その後ずっと農業。生産調整の頃、町の建設業でバイトしていたことはあるけど。亡くなった妻は農業を手伝っていた。やはり農家だから天候に左右される。作る作物によってはうまくいかないときも。『よかったで』という方が少ないね。『悪かったで』という方が多いんでないかい。借金は残っていく。そういうときのために貯金というけど貯金はたまらない」「国民年金約5万円。農地3町くらい、作ってくれる人がいるならと使ってもらっている。小作料は取らずに（それで人に馬鹿ではないかと言われつつ）。休耕保証料は70万ほどもらっている」（事例11）

こうして二つのグループの、人生の軌跡・プロセスにおける「蓄積的有利」「蓄積的不利」の一部を見てくると、いずれも、次に見るような子育て・教育を含めて、それぞれがそれぞれの、大変な人生を歩みながら今日にいたっていることが想像できる。しかし、それほど大きな差とはいえないにしても、就業の「安定」「不安定」が、すなわち、いわゆる恒常的な勤務形態を取っていたか、あるいはそこそこの規模の農業を営んでいたか、あるいは季節労働的な形態を中心にした就業形態を取りながら家計を支えてきたかによって、その後の人生で生活保護を受給するかしないかに、部分的にせよ影響を与えているように思われる。この中には、事例4（未婚）や9（離婚）といったいくぶん「例外的」ケースもあるのだが、人生の累積的有利・不利は、このわずか11例からも、よく見えると言っていいだろう。これを、この町の、この調査を世話してくれた民生委員さんなどの事例と対比すれば、その格差はもっと鮮やかな形で出て来るはずである。それは、民生委員さんの自宅を（調査世帯のお宅に案内してもらうために）一時的に訪問したという、たったそれだけのことからでも、想像できる。

3 調査世帯の息子・娘世代の生活と交流状況

ところで、それでは、当該世帯の「子どもたち」の人生に対して、以上に見たような「親」の人生における社会経済的軌跡の有利・不利はいかなる形で影響しているのだろうか。その証明は、たった一度の訪問による聞き取りで、どこまで明らかになるのか、そしてどこまで「関連性」が見いだせるかは、おそらく明確にはしえないと判断するのが正しいであろう。しかし、それでも、「関連性の中における影響力の分析」まではできないにしても、「関連性」の一部を垣間見ることではできると思われる。そこでまず、これまた今度は「親」から聞いただけという限界・問題点は伴うが、聞いた範囲で「子どもたち」がいかなる人生を送り、その「子どもたちと親はどんな交流があるか」、この点を記述していきたい。表3は11事例の「子どもたち」の生活の現況を簡単に整理したものである。なおここでも、とりあえず生活保護受給を基準に二つのグループに分けて見ておこう。

（1）生活保護受給世帯

・「長女は高校卒業。夫は自衛隊に勤務していたが、今は札幌の自衛隊の幹部がいるところで働いている。長男は高卒後1年専門学校に行き、現在I町にいる。次男は高校卒業後、航空自衛隊に入り、事故がもとで精神病になり入院中。未婚。三男は高校卒業後、会社員として働いている。長く独身で私と同居していたが結婚。それで私は一人暮らしになった。O市にアパートとK町に家があり、現在は札幌へ単身赴任している」「次男は兄弟の中で一番頭が良くて航空自衛隊の人事課にいたのだけど、治らない病気になったの。その後開発局にも勤めたこともあったし、いろんなところを転々としたのだが……Y町の精神病院に」「みんな大学まで行かせるお金はなかったね」「長男は月1回くらい支庁に来たときに顔を出す」「次男のところへは、外泊できないので私の方から年に1回か2回行っていた（他の兄弟が行かないから）。

表3 息子・娘たちの生活状況

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
1	続柄(年齢)	長女	長女(55)	長女(49)		長男(52)	長女(54)	長女(43)	長男(34)	長男(60代)	長女(52)	
	既婚・未婚等	既婚	既婚	離婚(2回)	未婚	既婚	既婚	既婚	既婚	不明	既婚	既婚
	家族構成		父母+2人	母+1人		父母+2人	父母+2人・孫	父母+2人	父母+1人	不明	父母+2人	父母+2人
	最終学歴	高校	中学	定時制中退		高校	高校	高校	高校	高校	中学	高校
	職業		夫・タクシー	彼・トラック		夫・会社妻・パート	夫・工場勤務					
	居住地	札幌	K町	名古屋		東京	小樽	K町	大阪	不明	小樽	札幌
	交流状況		よくある	行き来と電話		嫁と電話	買い物代行	週一度	月一度電話	なし	十数年来ず	2か月1回
備考		食料援助世話と相談	何でも言える関係		孫は有名私大と札幌の学校		孫は有名私大大学院、共働き仕送り大変	マンションにとんと来ない	20年、妻子と音信不通	葬儀に来ず初7日に来た	旅行いっしょに	
2	続柄(年齢)	長男(62)	長男(53)	長男(47)		長男(52)	次女(51)	長男(42)	次男(33)	次男(死亡)	長男(死亡)	
	既婚・未婚等	既婚	既婚	既婚		既婚	既婚	既婚	不明			
	家族構成		父母	父母+5人		父母+2人・孫	父母+2人・孫	父母+2人	不明			
	最終学歴	専門学校	中学	K農高		K農高	中学	高校	不明	中学		
	職業		夫・タクシー	倉庫守衛			焼肉店経営	会社	不明			
	居住地	I町	東京	苫小牧		小田原	札幌	釧路	不明			
	交流状況	月1回顔出す	ある	3年に1回位		ほとんどなし	電話・日帰り	月一度電話	なし			
備考		高校合格も自ら入学取り消し	K町にはめったに来ない		夫の稼ぎ悪く妻もパート	住居は賃貸アパート、孫は大学院・就職	家族を札幌に残し、単身赴任		4年前死亡	1歳くらいで死亡		
3	続柄(年齢)	次男(59)	次女(48)			次女(49)				三男(死亡)	次女(48)	
	既婚・未婚等	未婚				既婚					既婚	
	家族構成	1人	母+1人			父					父母+3人	
	最終学歴	高校	中学			K高校				高校	専門学校	
	職業		パート			寮管理人(夫婦で)				建築会社	夫・会社員妻・パート	
	居住地		東京			川崎					東京	
	備考	入院中+生活保護	母子なので面倒見る			ボーナス時仕送りあり				三男の保険金で争い	持ち家で安定	
4	続柄(年齢)	三男(56)				次男(46)				四男(60代)	次男(47)	
	既婚・未婚等	既婚				既婚				内縁関係	既婚	
	家族構成									子どもなし	父母+2人	
	最終学歴	高校				K高校				高校	私立大学	
	職業	会社員								林業関連	自営(服屋)	
	居住地	小樽				八千代				K町	札幌	
	備考	単身赴任札幌				ほとんどなし				ヘルパーなどの手続きを	義父の店・継孫・留学中	
5	続柄(年齢)								長女(60代)	五男(50代)		
	既婚・未婚等								再婚	既婚		
	家族構成									父母+2人		
	最終学歴								高校	高校		
	職業								夫・建設関係	建設関係		
	居住地								埼玉	埼玉		
	備考								ある	ある	長女の夫の会社に	

注) 表1と同じ。事例10・6の右欄は事例10の6番目の子どもの生活状況を示している。

昨年まではリュック背負って行っていたが、陸橋をわたるのが大変で今年まだ1回も行っていない。兄弟同士ではなかなか行かない。行けば暗い感じ受けるでしょ。行けば自分がつらくなるから行かないんだよ。私は施設（ホーム）には行かれない。かわいい息子を病院に押し込めて自分だけいい思いするなんて……次男と私どっちが先に逝くか」「仕送りはない。子どもたちにも仕送りするような余裕はない」「（親戚との交流は）ない」「（所属している団体について）（3年くらい前から宗教らしい団体に入っているようで、額はわからないがお金は納めているようだ）世界は後5～7年で人口が3分の2になるの（と話した）」（事例1）

- 「長女 55 歳、中卒、既婚。夫はタクシー運転手で K 町に住んでいる。長男 53 歳、中卒。タクシー運転手をしながら現在は東京に住んでいる。長男は高校に合格したが、親に無断で自ら入学を取り消しに行ってしまった（親を心配して）。中学卒業後、大阪の鋳造工場で働いていたが阪神大震災まで働き、その後ハイヤーの運転手になった。次女は 48 歳、中卒。母子世帯になっており、本人はパートで働いている。東京で生活している」「（進学に関しては）お金がないことはわかっていたので息子たちも無理は言わなかった」「長女は、中学校卒業後、農家を手伝って、後に電話受付の仕事をし、結婚。次女は、中学校卒業後、K 町の駅の売店で少し働いて、集団就職で布団工場に行った」「長女は子どもたちもすでに結婚し、現在町営団地に住んでいる。経済状況はまずまず、交流はよくある。おかずなどを持ってきてくれることがある。長男には子どもはいない。多分住んでいる住居は賃貸しだと思う。経済はまずまずだと思う。交流はある。次女は母子世帯で、賃貸し住宅に住み、自分から面倒を見るために行ったことがある」「亡くなった主人の家族等と電話などの行き来はある」（事例 2）
- 「長男 47 歳、K 農業高校卒業、名古屋で倉庫

の守衛をしている。既婚。長女 49 歳、定時制高校中退。離婚を 2 回して、現在道内の T 市に住んでいる。現在の彼氏はトラックの運転手」「（子育てや教育の苦労は）長女が高校 3 年の時、夜 3 ヶ月くらい友だちの家に行って遊んでいたことがあった。お父さんが寝るまで帰ってこなかったんです。長男は高校生の時にたばこで見つけたことがありました」「名古屋にいる息子は子どもが 5 人、3 年に 1 回くらい会いに行きます。T 市の娘とは私も行ったり、娘が来たりします。娘とは何でも言い合える関係です」「（親戚との交流は）一人になってから迷惑をかけたくないから普段はあまり……夫の実家には 1 年に 2、3 回」「兄弟とは電話で、1 年に 1 回お線香を上げにみんなでお墓参りに行くくらいです」（事例 3）

- 「子どもを作らなかったのが悪いからね。おばさん 36 歳で（親のように）死ぬと思って東京に行ってしまったからね。子どもに対する煩わしさがなくていいと言ってくれる人もいるけど、生活保護受けるとき『子どももいるでしょ』と言われる。それも切ない」（事例 4）
- 「長男 34、次男 33 歳。学歴は高校卒だと思うが次男はわからない。結婚しているかどうか、どこに住んでいるかもわからない。離婚後 20 年、子ども・妻ともにいっさい連絡は取っていない」「離婚前は旅館業を W 市で営んでいた。きつい女で、どうしても東京に帰りたければ帰ればと言われ、50 歳で全部おいて出てきてそのまま。その後、K 町で新聞配達の仕事を見つけ働いていたが、アルコール依存になった」「20 年前から親類の誰とも連絡も取っていない」（事例 9）
- 「長男は 60 代、中卒で、はじめは家具職人になりたいと弟子入りした。その後大工（弟子 2 人いる）をしながら O 市に住んでいる。しかし、長男は母親の通夜にも葬式にも来なかった。

次男（中卒）は運転手になりたいと言っていた。……兄弟の中で一番いい生活していたようだが、家を建てて4年で死亡。三男は高卒後、東京のパチンコ店に勤めた。酒でクビになり、町でブラブラして補導され、戻ってきて建築会社に雇われた。四男は、高卒で、現在内縁関係で世帯を持っているが、子どもはいない。（本人はわからないと言ったが、民生委員によれば四男がK町で林業の仕事に従事しているとのこと）長女（60代）は再婚、夫は建築関係の仕事している。埼玉に住んでいる。五男（50代）は、当初K温泉で働いていた。すでに20歳の頃に結婚していて子どももいた。その後、長女の夫の会社で働いている。「長男の嫁からは『面倒みれない』と言われている。四男とは10何年交流がなかった。娘と五男は気にかけてくれる」「子どもと疎遠になったのは、三男が亡くなったときの保険金の分け方でもめたから。三男は結婚していたが、亡くなる前に離婚していた」「（親戚との交流は）ある。R島の兄弟は父は違うが（母親再婚）本当に仲良くしている」（事例10）

（2）非生活保護受給世帯

- 「息子が一人。はじめの子は流産。次ができた（31歳の時の子ども）。三番目も流産」「息子は順調に育った」「（最終学歴は）息子がK高校卒業後、進学したいと言ったが、高2の時主人が病気になり、高3の時亡くなり、大学にやれなかった。本人は行きたくて行きたくて。学校の先生も大学にやれと言ったけど、『出面』の仕事や（夏）倉庫での仕事ではね……苦学してでも、と考えたけど、長続きしないと思った。あの頃、息子は思い詰めて自殺でもするのではないかと思った。心配して後をつけたこともあったね。バレて『ついてこなくていいよと言われたことがあった』。だから、結婚して子どもができたならその子らに託せと言ったんだ。一生懸命勉強したけどね。息子が『僕が働くと母さ
- んも楽だから』と言った。一人しかいない子どもを大学にやれなかったことが切なかったね」「息子たちの家は札幌だけど、現在は単身赴任で東京。年に3回くらいここへ来る。……お嫁さんはよく電話をしてくれる。今日もかけてきた。息子は全然してこない。かけてきても『母さん元気か、そうか』で終わってほとんどしゃべらない。やっぱり男の人はしゃべらないね。こっちからお嫁さんに電話することはない。息子の嫁はパートをしていて、その前は幼稚園の先生だった。パートだから月2回くらい来てくれることもある。入院したときもバスで来てくれた。困ったときは電話でやりとりあるよ。嫁、姑のいざござはない。離れているしね」「孫は東京のW大学（有名私大）、もう一人は札幌の学校に行っている」（事例5）
- 「（非行や病気などの経験は）やっぱりあったね。長男の方は。学校からは何も言っていなかったけど、いろいろあったみたい。確か3年の7月くらい……学校に行かないってなって、それで私なんぼ泣いたかわからない。情けないっしょ。先生方も来てくれるのね。もうすぐだからって。2学期行けば、3学期、少しだけで卒業できるからって。それでもいやだって言うから……退学届けも私が出しに行って。……次男は交通事故で、小学校2年の時……直るのに5年かかって……いろんなことがあったよ」「（最終学歴は）本人たちの好きなようにさせた。長女は高卒、長男は農業高校中退、次男、次女も高卒」「子どもは4人いるが、（住宅は持ち家かどうかなどは）わからない。長女54歳は道内O市にいる。夫は機械関係の工場で働いている。長女以外は皆本州にいるのでほとんど会えない。行き来はまったくない。長男52歳は現在小田原に住んでいる。次女49歳は川崎。夫と自動車会社の独身寮の管理人をしている。子どもはいない。次男46歳は八千代に住んでいる。既婚。子どもたちが本州に行ったのは、仕事がね、こっちにはなかったから」「長女が大きな買い物な

どは代わりに買ってきてくれることがある。(仕送りは) ないよ、やっぱりそれぞれ生活しているから、何もくれない。私がやるくらい。(しかし) 次女はボーナスの時少し仕送りしてくれることがある(旦那さんが送ってやれと言ってきて) (事例6)

- ・「子どもは2人。長女はK町(高卒)。次女は札幌(中卒)」「長女は東京の化粧品会社に勤めて、病院の事務などもしていた。結婚して2人の子どももあるが、長女の子どもたち(孫)は、今年の春から上の子が東京のK大(有名私立)の大学院、下の子は札幌の大学に。親は死にもぐるいだ。働いて働いて、旦那も給料もらっても何も残らないと言っている」「札幌にいる娘には30歳の子どもがいる。成人式で子どもがいたので、私が子守していた。娘は『高校行きたかったけど母さんたちはお金ないから、私は働くって』。だから娘は肉屋しかできない。(しかし孫たちが皆大学進学していることについて) それだけは、手を合わせて喜んでいます」「何年も洋品店で働いていて、旦那さんは学校は出ていないけど店長になって、偉い人が集まる場所であるってしゃべれなかったらしい。自分の子どもにはそういう思いをさせたくなかったんだらうな。学校に行きたいと言えば行かせてやりたい……と言ってたようだ。今上の孫は国立のT大学を出て博士号も持っている。下の孫は長野の大学と埼玉の大学の大学院を出ている」「親たちはこちらに来ることもあるが、商売しているから、来ても日帰り。泊まったとしても朝早く帰る。ともかく子どもたちの生活はピーピーだと思う」「孫にこの家は見せられない、もし友だちでも連れてきて『あれがおまえのおばあちゃんの家かー』なんて言われたらかわいそうでね」(事例7)

- ・「子ども2人家において仕事をしていたら、よく家の中は『わや』になっていた。畑があって、子どもを見ている暇がなかったもの。経済的に

も本当大変だった。子どもの教育には金かけないようにしていた」「長男42歳は地元の高校を卒業して大手の通信機器会社に。今は自宅を道内E市に建てて、単身赴任で道内K市に。本人は大学に行きたかったみたいだけで、行かなくてもいいと……。東京に本社があって試験に行ったの。帰ってきて全然ダメだったと言っていたけど、北海道で一人だけ受かった」「長女43歳も地元の高校を出て、現在は大阪で夫は公務員で主婦している。マンション暮らしで電話が月に一度くらい。ちょこちょこ来られないからね」「息子が札幌(現在はK市に単身赴任)にいてくれて本当に良かった。電話は月1回くらい、来るのは年に1度」「(親戚との交流は) 兄弟はみんなK町にいる。弟がちょこちょこ世話してくれるから助かる、電話もしょっちゅう来る。だから本当に心強い」(事例8)

- ・「長男は小さいときに死亡。長女は昭和26年生まれで、高校卒業。札幌に住んで、夫は電機メーカーに勤務し、長女もデパートでパートしている。次女は30年生まれで、服飾専門学校卒業。夫は会社員で次女もパートで働いている。東京在住。次男は31年生まれで、東京のS私立大学卒業し、妻の実家の自営業(洋服等)を引き継いでいる。札幌在住。この子には、あとで4年間に1000万円位送金したと言われ、ああそうかなと思った。スキーで国際大会に出たこともある。(いずれも子どもは2人、3人、2人で、住宅は持ち家である)」「(経済的状況に関しては) みんな安定している。長女の家族とは一緒に旅行に行く。2ヶ月に1回は訪問してくれる。次女は何かある時は来る。電話も。次男の子どもたちは2人とも海外に留学している」(事例11)

こうしてみると、それぞれの家族における子育て、教育の苦勞が垣間見えてくる。しかし、やはり、生活保護受給層と非受給層のグループの差異についていえば、それなりにあるように思わ

れる。事例数の少なさから問題はあろうが、前者は一般に、その子ども世代も不利を継承しており、不利の連鎖を断ち切れずにいるように見える。また家族関係も脆弱である。たとえば、事例1の精神障害の子どもを抱えた家族関係、事例2、3の離婚母子世帯の存在、事例10の多子のなかでの2人の子どもの死亡と2人の子どもの離婚・再婚、そして争いなど。これに対して、後者のグループは、次世代（子ども世代）で「安定」した仕事と持ち家の確保を行っている事例（事例8、11など）、あるいは次世代ではなお安定しているとは見えないが、さらに次の孫世代においてミドルクラスへの上昇の姿が推測される動きを示している例などが見られる（事例7など）。

しかし、そうは言っても、ここで見てきた一人暮らし世帯の多くは、われわれが訪問し、見て聞いた限りにおいては、決して「豊かな生活」には見えない。かなりの部分が文字通り「貧困な生活」として見えた。たとえば、民生委員さんが「汚くて入れないよ」という世帯、あるいは特に男性の一人暮らしの「衣食住」の「食」に関わった貧困、冬の北海道で健康な生活を営むのに必需品である風呂がないこと、年間100万円に満たないような低い収入、そして上述したもろいあるいは疎遠な家族関係。また子ども世代があるいは孫世代がミドルクラスの生活を営んでいると思われるにもかかわらず、「貧困」が地方に残されている現実（いわば「取り残された貧困」）。低所得・貧困層からの「脱出」は代代的にもそう容易なことではないと同時に、子どもたち世代の必死の生活もまた、親たちの貧困を解決するだけの余裕を残さないようなレベルの生活にすぎない、ということであろう。

おわりに

高齢者世帯の貧困問題は、最近でも、最初に引用した内閣府の報告にもあるように、まったく注目が払われていないわけではない。しかし、一般に、これまでは、わが国だけでなく、世界的にも、子どもや女性の貧困問題への警鐘の度合に比較し

て、戦後高度成長期に整備されてきた高齢者福祉制度の発展もあって、大きくは取りあげられてこなかった。それは、実際、高齢化社会における巨大有権者グループとして国家に圧力をかけうる存在でもあったことも大きく、欧米の先進国の「子どもの貧困」研究などにおいては、高齢者世代の「有利性」がたえず指摘されている⁽⁵⁾。

しかし、他方、高齢化社会における不平等問題は、今ますます拡大しようとし、さらに、この調査におけるたった11例の分析からも、現代社会における一般化した生活レベルからしても明らかに低く、現代社会における「貧困」という視点からして「問題」であることは察せられるだろう。それは、高齢化社会における階層的な不平等の最底辺に、「見える」ホームレスの問題とともに位置づくものでもあるが、貧困母子世帯などとともに「見えない」貧困を代表する形態でもあるとも言えよう。しかも、その関連性が、やはりこの「一人暮らし高齢者世帯調査」からも伺えたこと、これがこの調査ノートの一つの「結果」でもある。その点では、「はじめに」で述べた問題意識には、それなりに回答していると言ってもいいだろう。もちろん、そうは言っても、これだけの事例検討では、研究としては中途半端であることは言うまでもない。今後を期したい。

注・文献

- (1) 青木紀編著『現代日本の「見えない」貧困—生活保護受給母子世帯の現実—』（明石書店）、2003年。そこでは、いずれにしても、「とくにこのうちいくつかは、生活保護受給あるいは特別養護老人ホームなどの福祉施設、公営住宅などでの質素な年金暮らしであることを推測すると、親のかなりの部分が公的な生活援助サービスを必要としている階層となっていると判断される」（63～65頁）。それゆえ、このうちのかかなりの部分が、「娘からも親からも」経済的援助関係は薄くならざるを得ない関係にあること、言いかえれば「相互依存」が困難な関係にあることに触れておいた。
- (2) 内閣府政策統括官高齢化社会対策担当『多様な

ライフスタイルを可能にする高齢期の自立支援政策研究報告書について―「活動的な高齢者」、「一人暮らし高齢者」、「要介護等の高齢者」―(平成15年5月) <http://www.8.cao.go.jp/kourei/kenkyu/kenkyu.html>.

- (3) 青木紀「調査ノート：貧困の世代的再生産の構造(1)―北海道A市における離婚母子世帯分析―」『教育福祉研究』第6号、2000年。
- (4) 平岡公一編著『高齢期と社会的不平等』(東京大学出版会)、特に序章「研究と方法」参照。2001年。
- (5) たとえば、Cornia, Gioranni A., Danziger,

Sheldon and Danziger, Cornia(eds). *Child Poverty and Deprivation in the Industrialised Countries, 1945-1995*. 1997. Bradbury, Bruce, Jenkins, Stephen P., and Micklewright, John. *The Dynamics of Child Poverty in Industrialised Countries*. Unicef and Cambridge University Press. 2001.などの論調は、高齢者世帯の「有利さ」に対比して、「貧困の女性化」とともに、先進国における「子どもの貧困」を指摘している。なおこのような指摘は多くの欧米の文献で見られる。

(北海道大学教育学研究科教育臨床講座教授)

(北海道大学教育学部3年)